

今から15年前、生活期でかかわる利用者を見て、「(その方に)もう少し自分でできることが多くあれば、生活の質(QOL)が違ったのではないか」との思いを抱いた。生活期にバトンを渡す役割を担う回復期リハビリテーション病棟の存在を知り就職したのが、医療法人社団輝生会である。当時を思い返してみたとき、回復期リハビリテーション病棟についてつくづく無知の状態であったと今さらではあるが恥ずかしく思う。

入職してから3年経過したとき、現場から離れ「教育研修部」に配属となった。主な業務は、①職種を横断して実施する研修の企画・運営と、②介護福祉士を対象とした回復期リハビリテーション病棟で必要になる知識・技術習得に向けた研修の企画・運営である。教わる側から教える側に立場が変わった。ここが私にとって1つ目の転機だったと思っている。

人に何かを伝えるには自分の言葉で語れなければいけない。なんとなく知って

いるという程度の知識では伝える相手に何も響かない。自分自身が根拠を理解するまで知識を深め、伝えることが重要だと学ぶことができた。一方、「伝える＝伝わった」、自分の考えを伝えさえすれば相手に理解してもらえているという思いが強かったのもこの時期である。相手に1つでも多くの知識を「伝える」ことが自分の使命だと思ってしまっていた。

研修制度が整っているのはとても重要である。しかし、伝えるだけで終わってしまっている研修ではその効果が半減してしまいかねないと実感した。

伝えることも重要だが、「自ら考え行動できるスタッフを育成していく必要がある」と考えを変えられたのが、3年前、当法人が大きな組織変革を行ったときで、私は長年在籍していた教育研修を主に担う部署から病棟へ配属となった。この部署変更が私にとって2つ目の転機である。

組織変革前の立ち位置と比べ、現場で働くスタッフがすぐ目の前にいる。以前は教育を軸にスタッフ支援を行っていた。今は患者へサービスを提供する場面で自分の目で見ることでき、多くのスタッフと直接かわ

れるようになった。社会人として、専門職として、身につけてほしい事柄を現場で、絶好のタイミングで、直接伝えられる。これが本当の意味で「教育」と呼べるものではないかと思えた瞬間であった。

当法人の強みは、きめ細かな多職種協働である。この強みを支えているのは、故石川 誠会長が築き上げてくださった教育体制の基

盤である。この教育体制は、今も形を変えながらではあるが、回復期のリハビリテーション・ケアに携わる多職種と一緒に学びを深め合う機会を醸成してくれていると感じる。私自身、職種を問わず研修で相手に何かを伝えようとするときはまず、自分自身が学びを深めつつそれが現場で実践されているか、OJTを通し確認していきたいと考えている。こうした考えをもてるようになったのも、2つの転機があったからこそで、その場を与えてもらったことに感謝している。今後も試行錯誤しながら教育のあり方について考え続けたい。

巻頭言

現場で、絶好のタイミングで直接伝える



いそべ かなこ
磯部 香奈子

当協会理事

(初台リハビリテーション病院 回復期支援部マネジャー 介護福祉士)